あぜみち

◆私の住む「塩谷町」は栃木県北部に位置する人口一万四千人程の町です。世界遺産で有名な日光や関東の奥座敷と言われる鬼怒川温泉は比較的近距离にあります。観光バスはただ通過して行くだけです。観光客を引き止めるような場所も少なく、言い換えれば何処にでもある普通の町です。しかし純農村が故に、農業者である我々にとって仕事のやり易い環境であることが、我が家の経営に追い風となってきたのだと思っています。

土地利用型の大規模稲作経営を目指して、一九九年前に施設園芸の道から一大転換を計りました。町で最初の圃場整備事業を行ったのが私の地域で、完成した圃場を見た時に、「これからの経営はこれだ。この土地を利用できるスタイルでやっつこう」とひらめきが走ったのでした。それまでたいして利益の上がらない経営内容でしたから転換は容易でした。ただこれから先どうして農地を集積して行くのが良いか、それが一番の課題でしたが、地域の中での作業受託等を精力的に行った結果、意外と順調に農地の集積が出来たように思います。以来一九九九年が経過して何とか四〇ha規模に辿り着く事が出来ました。しかし、何故か思った程利益に結びつきません。面積が大きくな

ればなる程、設備投資も比例してきますし、生産調整も増大します。内容を良くするには自家販売するのも道だと思いい、経営の矛盾の軌道修正を考えたのが経営転換から一〇年経った時期でした。販売額を伸ばすにはマーケティング戦略が不可欠と判断して顧客の確保に努めてきました。もちろんハイリスク、ハイリターンを充分に考えた上での事でしたが。

これからの米政策の中では市場、消費者の求める米作りが謳われていますが、私もその方向に進んで行きたいと思っています。また、農業は地域の中で人間関係が特に大切であると同時に、地域に根ざしたものでなければなりません。人と自然の調和のとれた中での米作りを続けて行きたいと思っています。

(栃木県塩谷町 和氣勝英 農業)

◆男体山と高原山を頂き、湧水豊富な鬼怒川と荒川の間の水源に恵まれた、栃木県北西部の農村地帯にある人口約一万五千人の町に私は住んでいます。昭和五〇年代以降、水稲、畜産、林業経営中心の農業から園芸栽培への転換が少しずつ始まり、現在は、花卉栽培(キク、バラ)、施設栽培(トマト、ニラ)などによる大規模農業経営の確立に成功した町になりました。近在には、専業化・分業化を進めた大規模な水稲農家や、園芸部門においても経営面積千〜二千坪の施設専業農家が多く、町の中でバランスの

とれた近代農業が発展しています。

この地域に現在の農業があるのは、水田の減反政策の影響が大きいです。水田確立事業の導入により、県の指導や町の協力・助成を受けるとともに、農協と農家が長い間補助事業の活かし方を検討し、研究を重ね、進むべき方向を決めてきました。それが現在多くのリース事業を生み出し、事業を大きく改革して大規模経営の基礎となり、今日の近代的園芸の発展をもたらしたのもと思われまます。これまでの長い間の努力によって生産基盤が確立し、周年を通して消費者に生産物を供給できるようになり、一つの目標が達成されつつあります。

しかし、近年は農産物の十分な供給があるにもかかわらず、多くの輸入業者や企業が利益の追求だけに走って安全供給を怠り、日本の食卓を脅かしています。個々の生産者が将来も消費者に認めてもらえるよう、安全供給に努めることが大切だと思います。今、産地間の市場競争ばかりに翻弄されていると、外国市場の圧力に流されてしまいかねません。日本農業の必要性が問われる時代が、すぐ近くまで来ていることに気づく必要があると思います。自由主義社会の中で農業の価値判断をするのは、あくまで個々の消費者です。だからこそ農政に求められることは、目先にとらわれず、外圧に耐えることができ、消費者にも認められる農業者を多く育てることだと思います。

(栃木県塩谷町 神長壮太郎 農業)